



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	イスラエル王国時代の南北両王国における王権とヤハウェ宗教
Author(s)	山我, 哲雄
Citation	基督教学, 32, 25-28
Issue Date	1997-06-27
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/46582">https://hdl.handle.net/2115/46582</a>
Type	journal article
File Information	32_25-28.pdf



# イスラエル王国時代の 南北両王国における王権と ヤハウエ宗教

山 我 哲 雄

ダビデとソロモンの築いたイスラエル統一王国の崩壊（前九二六年頃）後、北のイスラエル王国と南のユダ王国がたどった歴史的運命の大きな相違の一つは、両王国における王権とその安定度をめぐる状況にあったといえるであろう。すなわち北王国イスラエルにおいては、そのわずか約二百年間の歴史の中でクーデターが多発し、十人の王のうちの八人が暗殺され、その都度王朝交替が繰り返されたのに対し、南王国ユダでは、少なくとも形式的にはダビデ王朝内部で安定した王位継承が行われ、ダビデから王国滅亡時（前五八七年）のゼデキヤまで、四百年以上にもわたって二一代の単一王朝支配が貫かれたのである。北王国を支配した九つの王家のうち、孫の

代以上に及ぶ「王朝」を形成できたのは、オムリ王朝（三世代、四人）とイエフ王朝（五世代）の二例だけであり、その他は自分自身か息子の代で倒されている（最短はジムリの七日天下）。これに反し、南王国でダビデ王朝の打倒が企てられたのは、後にも述べる結局は失敗に終わる王妃アタルヤの場合一例だけであり、その他は王が暗殺された場合（ヨアシユ、アマツヤ、アモン）でさえ、必ずダビデ王家の中から次王が立てられている。

かつてA・アルトは、北王国の王制が士師時代の英雄的指導者の伝統を引くカリスマ的な性格のもので、世襲制とは相容れないものだったとすることで、この現象を説明しようと試みたが、このような見方は余りにも思弁的なものとして退けられた。しかしそれに代わって提出された、南王国が事実上単部族国家であるのに対し北王国が多部族国家であったとか、北では南よりもカナン系住民が多く、イスラエル系住民との対立が政治や社会に多大な影響を与えたとする純粹に世俗的な事情については指摘だけでは、この事態を十分に説明できるようには思われない。むしろ北と南における王権をめぐる状況の

相違は、両国におけるヤハウエ宗教のあり方と、それぞれの王権に対するその関係とに密接に関連していたように思われる。

サムエル記上八一―一二章の王制導入をめぐる叙述からも分かるように、「奴隸の家から解放する神」ヤハウエの支配する民イスラエルと、「人間による人間の支配」に他ならない王制という制度は、本来的には本質的に相容れないものであった。しかしダビデ・ソロモン時代の目覚ましい政治的・経済的成功によって、王国体制は既成事実として確立された。サムエル記下七章の「ナタン預言」やいくつかの王の詩編からは、エルサレムにおいてはすでにソロモン時代に、「預言」や「契約」といった観念を通じてヤハウエとダビデ王朝の間に特別な関係が設定され、ヤハウエの意志に基づくダビデ王朝の永続的支配の正当化、絶対化が図られたことが窺われる。そこには、常に王権の神的起源を主張したオリエント世界の神聖王権イデオロギーの影響も感じられる。ダビデ王朝の王が（養子関係による？）「神の息子」とされたこと（サム下七・一四、詩二・七、八九・二八）は、いわばこのようなイ

スラエルの王権神学の頂点をなすものであった。

しかし、ソロモンの死後の王国分裂は、このようなダビデ王朝による永遠の支配のイデオロギーが、ダビデの出身部族であるユダ族を除く北部諸部族には通用しないことを実証する出来事であった。もちろん、その後の北王国においても、同じようにヤハウエ宗教によって王権を絶対化しようとする試みがなされたかかったということではない。北王国の起源であることが推測できる少数の詩編の一つ詩編四五・七で王が端的に「神（エロヒーム）」と呼ばれていることは、この点で非常に示唆的である。しかしその後の歴史的展開は、北王国の民衆の間にそのような観念の浸透を許さないものがあつたことを示している。

この点に関連して興味深いのは、ダビデ王朝の支配から離脱しようとする最初の試みであるヤロブアムの乱が、預言者アヒヤによって教唆されたものとされていることである（王上一一章）。後のオムリ王朝の打倒にも、預言者エリヤやエリシャが関与している（王上一二章、王下九章）。南では預言者がダビデ王朝の支配体制に取り

込まれてそれを支える役割を担ったのに対し（ナタン）、北では有力な預言者たちが既成王朝を打倒する側に回ったのである。記述預言者たちでも、北で活動したアモス（七・一一）やホセア（一・四、一三・一〇—一一）は既成王朝の断絶を宣言した。これに対し、南王国の預言者であるイザヤやミカは、現実の王たちに大いに失望させられながらも、あくまでダビデ王朝の末裔に未来の救いを託したのである（両者のメシア預言を参照）。この事實は、北王国とは異なり南王国においては、ダビデ王朝と結び付いた王権神学が強力にその王朝支配補完的な機能を果たしたので、分裂後も南王国では神の救済がダビデの子孫を通じてなされるという思想が保たれ、批判的思想家としての預言者たちの思考さえ規定したことを示している。

南北の王権観の特色を考えるうえできわめて示唆的なのは、前九世紀の中葉に北と南で相次いで発生した、内容的にも関連し合った三つのクーデターである。預言者エリシャの支持によりオムリ王朝を打倒したイエフの乱（王下九章）は、軍事実権を握った高級軍人が前王朝を

倒してその王族を皆殺しにし、それに替わる自分自身の王朝を創始するという、北王国で繰り返された政変の典型的な例である。オムリ王朝の王女で南王国に嫁いでいたアタルヤは、自分の息子であるユダ王アハズヤがイエフの乱に巻き込まれて殺されたのを知ると、ダビデ王家の一族を皆殺しにして、みづから南王国の女王となった（王下一一章）。オムリ王朝の唯一の生き残りであるアタルヤのこの王位篡奪劇は、南王国で北王国型のクーデターを実現させ、またダビデ王朝に替えて南王国でオムリ王朝を存続させようとする試みであった。そしてアタルヤの支配した六年間は、先に述べたように、南王国でダビデ王朝の支配が中断した唯一の例外期間であった。しかしエルサレム神殿の祭司ヨヤダは、ただ一人生き残ったダビデ王朝の王子である幼いヨアシシュをかついで逆クーデターを起こし、アタルヤを打倒してダビデ王朝を復興させた。ユダの国民は皆これを喜び祝ったという。イエフやアタルヤの企てが、北王国の他のすべてのクーデターと同様、前王朝に替わる新しい王朝を打ち立てることを目指すものであったのに対し、ヨヤダのそれは、

外部の勢力による王位篡奪と王朝打倒の試みに対抗し、既存の王朝を守り、その存続を確保しようとする試みであった。この点で後者は前二者とは正反対の性格のものであったと考えねばなるまい。このことは、少なくとも南王国においては、ヤハウエの加護のもとでのダビデ王朝の永遠の支配というイデオロギーが広く浸透し、ユダ国民にとってはダビデの家系に属さぬ王というものがあったく考えられないものになっていたということを示している。

唐突な比較であるが、ヤハウエ宗教とダビデ王朝の支配を和解させ、前者によって後者を絶対化しようとする南王国における王権神学の展開には、わが国における、天孫降臨神話によって天皇家の「万世一系」の支配を正当化しようとした試みを想起させるものがある。これに対し、北王国の預言者たちに代表される王権観は、むしろ古代中国の易姓革命に近いものであったのではなからうか。君主が天（すなわち神）の意志に背く統治を行った場合には、天命を受けた者がこれを倒して新しい王朝を始めてよいとする思想である。過去の日本人は、封建

的社会体制を補完するものとして儒教を積極的に取り入れたが、万世一系の天皇を中心とした国体に相応しない易姓革命の思想だけは、ほとんど受け入れようとしなかった。（これを説く『孟子』を日本に運ぼうとすると必ず船が沈んだ、という伝説まであったそうである）。分裂王国時代のイスラエル王国とユダ王国の王権をめぐる歴史的事情は、「徳治を根本条件として天命の降下を期待した中国の君主と、アマテラスオオミカミの子孫に皇位の継承が限定されていた日本の天皇の地位との相違」（栗原朋信）についても改めて考えさせるものがある。